



PISA

IN FOCUS

30

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

学習方略によって 恵まれた生徒と恵まれない生徒の 成績格差を埋めることができるか。

- 情報のまとめ方を知っている生徒は読解力の成績が良い傾向がある。
- 恵まれない生徒がより恵まれた背景を持つ生徒と同程度に効果的な学習方略を用いるならば、2グループ間の成績格差は20%ほど縮まる。

読解力が高いだけでは 十分でない…

情報技術がますます高度化し、新しいメディアがほぼ毎日発表されていることから、熱心な読者とはどういうことか、そして読み方をどのように教え、学べばよいのかが見直されている。情報過多はますます大きな問題となっており、人々は一定のデータの流れを管理し、それを効果的にまとめ、自分のニーズと関連のある題材を特定することも学ばなければならない。

PISA2009年調査では、生徒が最も有効な学習方略についてどの程度認識しているかが調査された。生徒は、次の五つの選択肢を使って、読んだ文章をまとめる方法を説明することが求められた。(1)「文章中の最も重要な情報が要約に示されているかをじっくりと確認します」、(2)「文章に目を通して、最も重要な文に下線を引きます。次にそれらを自分の言葉で要約として書きます」、(3)「要約を書いた後で、各段落がもれなく要約に含まれているかを確認します。各段落の内容を含めなければなりません」、(4)「要約を書く前に、できるだけ何度も文章を読み返します」、(5)「できるだけ多くの文を正確にまねするようにします」。参加国の専門家には、異なる方略の相対的有効性を判断することが求められた。専門家の判断では、情報をまとめる上で方略1と2が最も効果的であり、方略3と4が適度に効果的であり、方略5が最も効果が少ないと判断した。



PISA

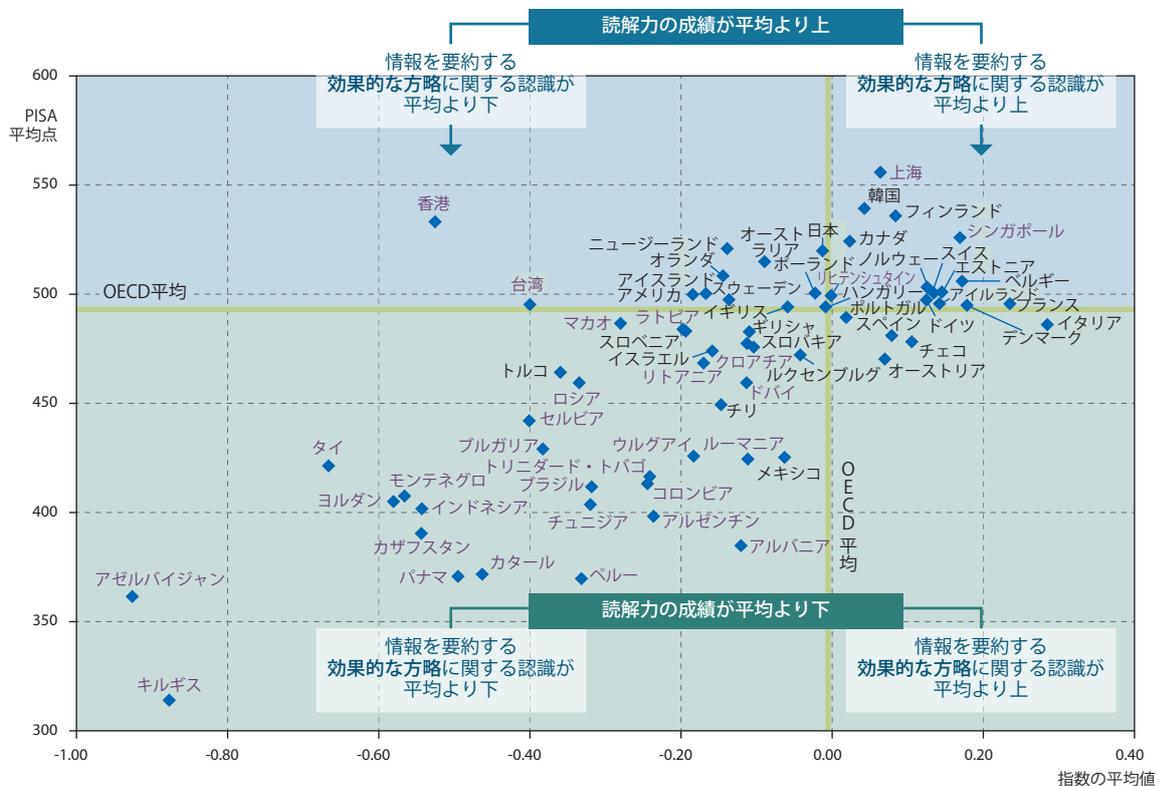
IN FOCUS

最優秀の成績の生徒は読書によって得た情報を最も効果的に要約する方法も知っている

PISA調査の結果から、平均的な読解力の成績が優れている国は生徒が情報の要約方法を一般に知っている国であることが分かった。各国で効果的な要約方略を知っていることと読解力の成績との間に正の関係があることも明らかである。例えば、OECD加盟国全体では、情報を要約する方略としてどれが最良であるのかを知っている生徒と、ほとんど知らない生徒の間の読解力の差はPISAの得点で107点であった。これは学校教育2年分以上に相当する。

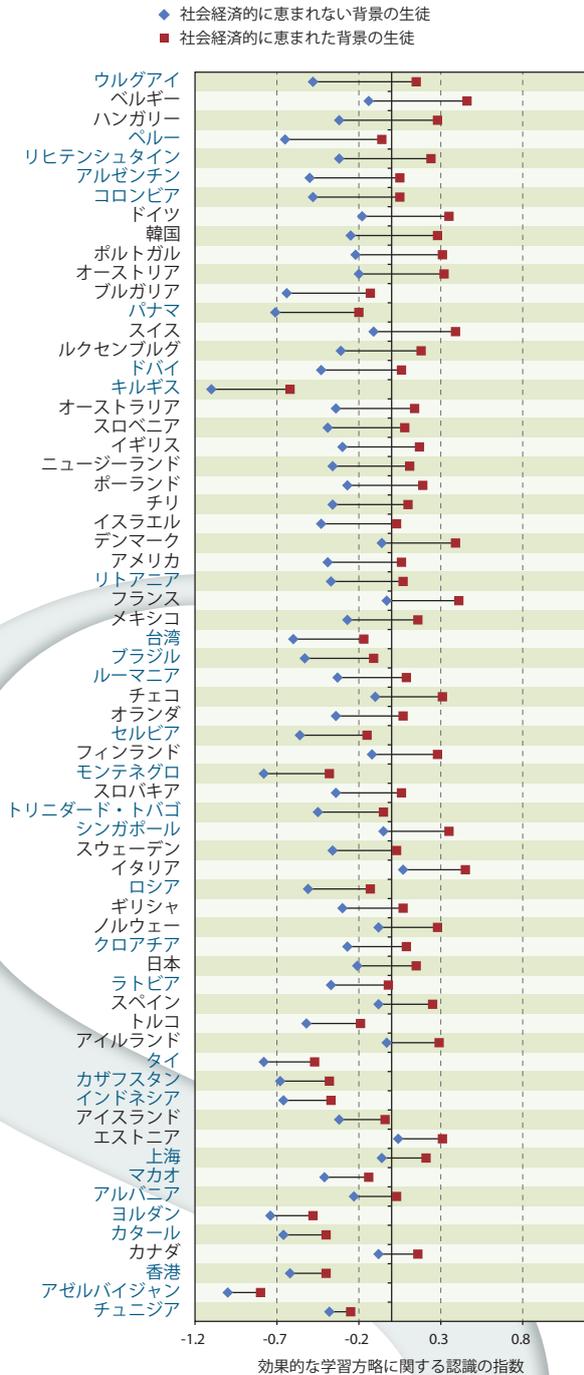
また国によって、特定グループの生徒が情報を要約するためにどの方略が最も有効であるかを知っている程度も大幅に異なっている。例えば、OECD加盟国では、社会経済的に恵まれた背景を持つ生徒の方が恵まれない背景を持つ生徒よりも多様な学習方略の相対的有効性についてよく知っていた。この違いは、恵まれた生徒と恵まれない生徒の間での成績の差に影響を及ぼしたのであろうか。また影響を及ぼしたとすれば、それはどの程度の影響だったのであろうか。

読解力の成績と情報を要約する最も効果的な方略に関する認識の関係





学習の仕方を知っているかどうかの違いは大きい



注: 国名が黒色表記のものは、OECD加盟国。効果的な学習方略に関する認識の指数において、0はOECD加盟国の全生徒の認識の平均を表す。生徒の3分の2は、尺度の-1から1までの間に位置し、-1は認識レベルが低いことを、1は高いことを表す。

恵まれない生徒の読解力の成績は、効果的な学習方略に関する生徒の認識を高めれば向上させることができるかもしれない

PISA調査の結果は、社会経済的に恵まれない背景の生徒が学習への最良の取り組み方についてもっと知っていたならば、社会経済的に恵まれた背景の生徒にもっと近い得点を取ることができたことを示唆している。31の国・地域において、最も恵まれない生徒がその国・地域の最も恵まれた生徒と同程度に要約の方略について知っていたならば、読解力の成績は少なくとも15点は高かったはずである。オーストリア、ベルギー、ドバイ、フランス、ハンガリー、ドイツ、リヒテンシュタイン、ルクセンブルク、ニュージーランド、ポルトガル、スイス、ウルグアイでは、恵まれない生徒が恵まれた生徒と同程度に効果的な要約方略を知っていた場合に恵まれない生徒が達成し得る得点差は20点を超える。すなわち正規の学校教育半年分に相当する。OECD諸国全体では平均して、学習方略の認識の低さで表される恵まれない生徒の潜在的な可能性はPISA得点で17点である。OECD諸国全体で、恵まれない生徒がより恵まれた背景の生徒と同程度に効果的な学習方略を利用する場合には、二つのグループの成績格差はほぼ20%縮まる。ベルギー、フィンランド、韓国、リヒテンシュタインでは、この格差は25%縮まる。

PISA調査では因果関係をはっきりさせることができないが、このような結果から、社会経済的に恵まれていることを高い読解力につなげる方法の一つは、どの学習方略が最も効果的かの理解を深めるためにより多くの機会を生徒に与えることであることが示唆される。例えば、恵まれた家庭の両親は子供が低年齢のときに子供への読み聞かせに時間をかけ、話を聞かせる傾向が強い。



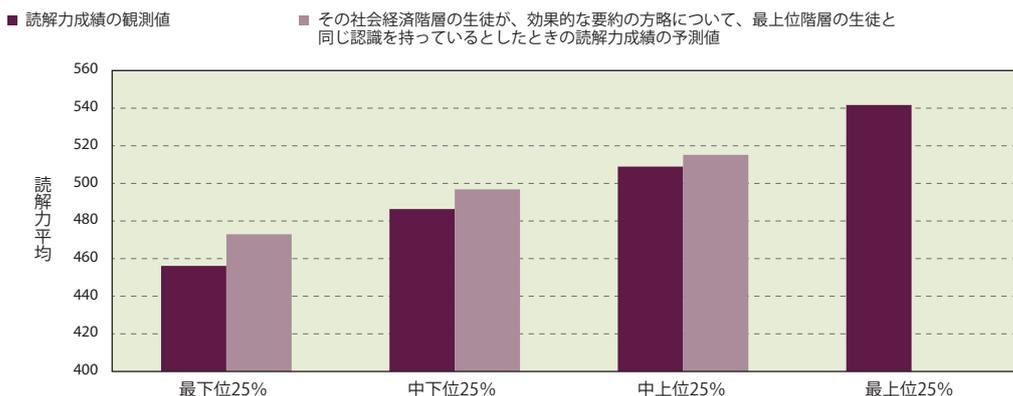
PISA

IN FOCUS

また、10代の子供と社会政治的問題について話をしたり、子供が読んでいるものに関心を持つ傾向も強い。このような交流は、代替的な学習方略の適用を試みて実践する十分な機会を生徒に与えるため、生徒が自身の学習の助けと成り得る戦略についての認識を形成する上で極めて重要であるかもしれない。

学校も生徒にどの学習方略が最も効果的であるのか認識させる役割を担っている。とはいえ、学校は社会経済的状況に基づく成績格差を強めてしまうこともある。多くの国では、社会経済的に恵まれた家庭は、恵まれない家庭とは異なる地域に居住しており、その子供も別の学校に通っている。PISAの調査結果からは、恵まれた家庭の両親は教育水準(学校が生徒に効果的な学習方略を教える能力を含む)に基づいて、子供を私立の学校や他の公立の学校に行かせることを選択することができ、また多くの場合そのようにしていることが分かる。こうした両親は、一般に恵まれない家庭ほどはそうした学校の費用や場所といったことの制約を受けない。

恵まれない子供が、恵まれているクラスメイトと同程度に効果的な要約の方略を認識していたらどうなるか(経済社会文化的背景の4段階グループ別)



注: 社会経済的に恵まれていない・恵まれている生徒とは、各国内部アセスメントのPISA経済社会文化的背景の指標(ESCS)において、最下位・最上位階層の生徒を指す。

出典: OECD PISA 2009 database, Table III.3.5.

結論:ほとんどの国・地域で、恵まれた生徒と恵まれない生徒の間の読解力の成績差については、15歳になるまでにどれほど生徒が学習方略を学んだのかによって部分的に説明することができる。両親や教師は、全ての生徒が最適な学習への取り組み方を知ることができるようにすることで、この成績格差を縮める手助けをすることができる。

本稿に関するお問合せ先

担当: Francesca.Borgonovi (Francesca.Borgonovi@oecd.org)

出典: OECD (2010), *PISA 2009 Results: Learning to Learn: Student Engagement, Strategies and Practices*, OECD Publishing.

参考サイト
www.pisa.oecd.org
www.oecd.org/pisa/infocus

次回テーマ:

「学業のオールラウンダーとは誰のことであり、どこにいるのか」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。